赤軍

特　別　号

―世界党建設・世界赤軍兵士へ
飛翔する革命的九同志の出発宣言―

共産主義者同盟赤軍派

序文

(1)

全世界を暗雲が覆いつつある。帝国主義的殺戮が、今や全世界を支配しようとしている。プロレタリアートは自らの未来の可能性の保持を武装によってのみ得られようとしている。一発の銃声のなかに、プロレタリアートの未来が凝集されている。

史上、幾度となく、くり返しされて来た、プロレタリアートの全世界的闘いは、今、未曾有の深さをもって開始され始めている。しかし、この英雄的なプロレタリアート戦士の全生命を賭した闘いにも拘らず、全世界は破局へと、その歩みを向けている。

プロレタリアートの全世界的成熟は、それに似あった帝国主義を外化し、プロレタリアートの未来への接近は、幾多の歪曲し、人民の自然発生性に依拠する党派を生んでいる。

プロレタリアートは、成熟し、その歴史的諸関係の逆転を今こそ、不可避のものとしているが故に、その闘争は、それを止揚しうる徹底した目的意識性に指導された闘いとして形成されねばならないのである。

帝国主義世界体制が、音をたてて崩れる時それはより徹底した帝国主義世界体制を展望する。

全世界プロレタリアートは、その全生命と運命を賭して、革命戦争を開始している。帝国主義による後進国の原始蓄積の収奪と、余剰農産物導入は、後進国を根底から破壊し、後進国人民は、労働者国家の人民と結合しつつ、巨大な革命戦争を作り出している。第二次大戦と、戦後の朝鮮―ベトナム―インドシナの革命戦争とそれと結合した先進国の闘争の過程は、その敗北にも拘らず、過渡期世界の階級闘争、三ブロックの階級闘争を同一の水準、同一の次元に達する段階にまで到達させた。

そして、今、全世界のプロレタリアートは自らの運命を決定すべき、さし迫る破局を、戦後世界体制の根底的な再編過程のなかで迎えているのである。

世界プロレタリアートの成熟をうけ、その止揚に向けた闘いを、先進国に於いて唯一、目的意識的に追求した闘いが、先秋の前段階蜂起へ向けた数々の闘いであった。

既に開始されている世界革命戦争を、徹底した階級と階級の戦争として、プロレタリアートのヘゲモニーによる闘いに転化しうる唯一の基軸とそ、先進国を主戦場とした世界革命戦争の形成に他ならない。全世界的なプロレタリアヘゲモニーこそ先進国プロレタリアートが担っているのである。

それこそが、後進国遊撃戦―労働者国家根拠地という体制間戦争への傾向、不徹底な革命戦争の方向性を止揚し、かつ、全世界的分業諸関係の止揚から、価値関係―価値意識の転換をその解決点としている。全世界プロレタリアートの蓄積している矛盾を止揚しうる闘いの形成になりうるのである。

全世界プロレタリアートの成熟こそが、先進国における「蜂起の軍隊」の形成を要求し、この正規軍こそプロレタリアヘゲモニーを世界的に体現し得るのである。「蜂起の軍隊」は系統的、

永続的に全人民の中から形成され続けるであろう。

この「蜂起の軍隊」こそ、全世界を覆い尽くした、資本制生産様式が、極限的に生み出した、プロレタリアートの歴史性の総体を担い、労働者国家、後進国の軍隊を領導して、全世界人民の権力実体を担いきっていくのである。

プロレタリアートの成熟は、その深さ故にその対決を、党と国家権力の闘いとして形成する。党の世界的―国内的ヘゲモニー、蜂起の軍隊を中軸とした組織にこそ、プロレタリアートの成熟は実体化し、一切の蜂起の永続性は、これが保証していくのである。

資本制生産様式の極限的な発展は単純再生産を担う本来のプロレタリアートの資にまで分解し、ブルジョアジーは、これに公民としての地位を極限まで与えつつ、政治―経済―軍事の一体化した体系でもって収約しようとしている。党はこのプロレタリアートの逆転を不可避とする成熟を未来から組織する。このプロレタリアートの成熟が深ければ、深い程、それは党と権力の目的意識的な闘いとして階級闘争は形成されていくのである。

今や、この全世界的な体制間戦争に向けたあるいは、帝国主義の全世界の解体に向けたさし迫る破局が急速に進行している。そして、このさし迫る破局に勝利するものこそ、プロレタリアのヘゲモニーによる世界革命戦争の開始に他ならない。先進国のプロレタリアートは自ら二重の任務を背負っているのである。

それは、日帝国主義打倒に向けた闘いのみではなく、全世界プロレタリアートの権力こそ、この先進国の軍隊の領導の下に成立するのである。

従って、それは同時に、先進国を主戦場にしつつ、世界単一の革命戦争を形成していく世界―国内的ヘゲモニーの形成が要求されていくのである。これとそ、世界党の建設であり、「蜂起の軍隊」―「世界遊撃軍」の形成に他ならない。

我々は、この世界プロレタリアートの成熟を体現し、この革命戦争の形成とそが、我々をして、先秋、前段階蜂起を要求したのであり、この闘いとそが、世界―国内のヘゲモニーを形成せしめる主体として、我々を登場せしめたのである。

蜂起の可能性と永続性とそ、この世界的―国内的ヘゲモニーが保証しうるのである。

過渡期世界の成熟が、世界的な危機の形成を党を中軸とする目的意識的な闘争を媒介に発現する時、我々は二重の重みをもって、全世界プロレタリアートの要求に答えねばならなくなっているのである。

再び未曾有の三〇年代を繰り返さない為にも、先進国プロレタリアートが不滅の正規軍を形成し、全世界の革命戦争をプロレタリアヘゲモニーの下に展開する事が、全世界プロレタリアートの死命を制し始めているのである。

既に蜂起を可能にし、永続化せしめる、党―軍が、世界的―国内的に形成されている。一挙的な蜂起が開始されようとしている。全世界的権力再編が、帝国主義―労働者国家という対決関係で形成されている。米―中、日―中戦争遂行が、帝国主義軍隊の任務となり、それに向け、機動隊政治が国内を強権化においている。自衛隊―安保軍改治と直接的に対決し、全世界の

権力ープロレタリアートの関係を我々を基軸に展開し得る領域に飛躍しない限り、いつまでも、権力は巨大なもの、打倒不可能なものに映っていくだろう。

一発の銃声を発しきれない指導が、再度の世界的敗北を作りきっていくのである。

(II)

この革命的、英雄的九同志の闘いにこそ、先進国プロレタリアートの二重の任務が明確につき出されている。自国帝国主義を打倒すると同時に、全世界の人民を社会主義に向けて領導し抜く一切の任務である。先進国を主戦場としつつ、世界単一の革命戦争を遂行する任務である。

そして、それは、この全世界的なさし迫る破局を、プロレタリアのヘゲモニーによる革命戦争の開始へと導く、世界ー国内的ヘゲモニーの形成である。

先秋の前段階蜂起を担った同志を中心とする九名の同志は、この前段階蜂起こそが、全世界のプロレタリアの成熟を実体化し、止揚せんとする闘いを最も革命的、英雄的に闘い抜いた同志であるが故に、全世界の人民を、先進国を主戦場にした、プロレタリアヘゲモニーによる単一の革命戦争を組織する主体となり得、かつ、その実践者となったのである。

我々は不滅の蜂起の軍隊を革命の正規軍として形成していくだろう。そして、全世界プロレタリアートの勝利に向け蜂起を開始するだろう。体制間戦争とこれを射程においた権力再編を粉砕し抜くだろう。

全自然、全物質的諸手段を奪い返し、世界的分業諸関係を止揚し、新たな価値関係を作り出していくだろう。

全世界プロ独の権力が、先進国の軍隊の質を中軸にしない限り形成されないことを我々は知っている。そして、過渡期世界のプロレタリアートの成熟が、目的意識的な蜂起をしてのみ形成される事も知っている。

そして、不滅の蜂起の軍隊が、プロレタリアートのヘゲモニーによる革命戦争を開始しない限り、過渡期世界の高次な自然発生性はより悲劇的な結果をもたらすだろう。中国の革命的同志こそ、この典型に他ならない。

そして、我々日本の八派共闘の同志諸君も主観的には反スタながらも、客観的には完全に、この毛戦略にはまり込んでいる。大衆蜂起ー権力危機の招来ー労働者国家の左傾化によるというこの一本の糸は何を意味するのであろうか。中国を先頭とする労働者国家の左傾化ー典型的には朝鮮危機を媒介に権力の危機を待とうという戦略であり、大きな毛戦略のなかで、その一環として、先進国で遊撃戦を展開しようというのが彼らである。これは彼らが何と弁解しようとも、客観的に彼らはこの位置を明確に占めているのである。

世界プロ独の成熟を蜂起の軍隊に体現し、世界的危機を党のヘゲモニーとして実践するこの過渡期世界の党と大衆の結合をしらない彼らが、底なしの待期ー日和見主義であり、労働者国家の成立による大衆の高次の自然発生性にあり、遂にこれを低めている何ものでもないのである。

不滅の蜂起の軍隊が世界ー国内的ヘゲモニーと結し、世界革命戦車を作りきっていくのである。

権力再編が既に、対中戦争を射程において進められ、中国が帝国主義引き込みを戦略とする時、一国的に危機を待ち、危機が直接的に外化するかの様に思い込んでいるおめでたい輩が、プロレタリアートを裏切り、未曾有の悲劇を作り出していくのである。

権力が大きくみえすぎる諸君が、九名の同志の実践によって、少しは把握できただろうか。

全世界の同志諸君、そして全日本の同志諸君、全世界プロ独権力樹立に向け、階級と階級の徹底した革命戦争を開始せよ！

今秋、我々は首都を制圧し、反革命同盟軍と対決するだろう。

世界プロ独権力に向け不滅の蜂起の軍隊に結集せよ！武装蜂起統一戦線に結集せよ！

世界党の旗の下、先進国を主戦場とした単一の世界革命戦争を創出せよ！

世界党の下、労働者国家を世界革命戦争の根拠地に！

今秋、日ー米前段階武装蜂起万才！

世界党ー世界赤軍万才！

世界社会主義万才！　世界プロレタリアート万才！

九名の同志よ！人類史の創出に向けた世界革命戦争の炎のなかで、再び鉄の如き握手を！

そして、朝鮮民主主義人民共和国の同志よ、日ー米を主戦場にした革命戦争の準備を！紅軍の同志よ、世界革命戦争勝利に向けて握手を！

(1)

全ての日本プロレタリア諸君、人民諸君、同志諸君！
そして全ての革命的世界プロレタリア人民諸君！
我々は、今、日本を出発せんとしている。
ハイ・ジャックで。。。。。

六〇年代後半、確実に、万国プロレタリア人民の決死の闘いが、世界革命の時代、世界革命戦争の時代を告げてきた。

この時代、万国プロレタリア、人民の力によって、国籍、国境はとってはらわれるべきである。

国境、民族を乗り越え、万国プロレタリア人民が団結してこそ、帝国主義ブルジョワジーを、この地球上から一掃しうる。

だが国境、民族をこえた、万国プロレタリアの団結は、帝国主義ブルジョワジーとの血の闘いを経ることなしにはありえない。

そして、又、全てのプロレタリア、人民は知っている。過去、幾度か、「国際主義」「万国のプロレタリア団結せよ」の旗の前に決起せんとしたことか。そして、その度に、如何に多くの「共産主義者」達が、その名の下に、プロレタリア、人民を裏切ってきたかを。。。。。

今、世界革命、世界革命戦争の時代である。

この時代を領導しようとする我々は、まず我々自らを、この時代にふさわしい主体に転化ー昂め上げなければならない。

我々は確く、信じる。我々が、言葉だけでなく、現実的に、徹底した「国際主義者」になり切った時のみ、プロレタリア人民の心を固く把えるだろうと。

ハイ・ジャックは、その出発点である。我々は意識的に自ら国籍を捨て、国境を強行的に突破することから、それを開始せんとしているのである。

(2)

六〇年代後半、世界、全ての地で、抑圧される、全ての人々が、生への闘いに決起した。

だが、そのいずれもが、一国家、一民族の壁をとっぱらい、全世界獲得へと永続化されねばならなかった時、後退した。

フランス五月革命がそうであり、我々の昨年十一月前段階武装蜂起の敗北がそうであり、ヴェトナムに於けるテト攻勢から、和平会談ー臨時革命政府へのコースがその現れであり、中国の文化大革命も、又、そうである。

一国家、一民族から、全世界獲得への永続性は、世界党ー世界赤軍に媒介されてのみ保証される。

世界の問題は、一国の問題であり、一国の問題は、世界の問題である時代を意味するのであり、全世界を獲得する思想ー理論ー実践ー組織をもってしてのみ、この限界ー後退を突破しうる。

帝国主義ブルジョワジーは自らの一国的危機を、侵略ー抑圧ー反革命戦争の全面開始ーなし崩しファシズムによって、この時代を乗り切ろうとしている。

この帝国主義、ブルジョワジーの侵略ー抑圧ー反革命戦争に対し、世界プロレタリア、人民は、前段階武装蜂起⇑世界革命戦争ー世界プロ独ー世界社会主義ー世界共産主義をもって、現代世界を止揚し、全世界を獲得しなければならない。

我々は、まず、前段階武装蜂起、世界革命戦争を闘える主体ーその統合指令部から建設、着手しなければならない。

六〇年代後半の激動の時代と、そのプロレタリア・人民の一時的敗北が、このことを深く教えてきた。

昨年後半から開始されたハイ・ジャックこそ、この新たな時代への象徴である。

米ー中南米を中心に展開されている、これらは、自然発生的には、一国的限界ー敵権力の弾圧の強化ー亡命としてあるとしても現実的には各国階級闘争指導層の国境ー民族を越えた団結へと向わざるを得ない。

世界武装プロレタリアートの統合指令部ー世界党建設への第一歩が、踏み出されつつある。

(3)

マルクスの理論と実践は、国境を越え、民族を越えその時代の心ある全ての人々を抱えてきた。

レーニンの理論と実践も、又、そうである。

六〇年代後半、全世界、至る所で、苦闘するプロレタリア人民が、どれほどまでに、これらに匹敵する理論と実践を、先進国、後進国、労働者国家を問わず、全世界を獲得しうる共通の理論と実践を希望したことだろうか。

これらの人々が、心底から闘えば、闘うほど、レーニン・ロシア革命以降の国際共産主義運動ーその「正統」指導部の理論と実践にあきれただろうか、否、憤りを感じただろうか。

六〇年安保から、六〇年代に於ける日本階級闘争の位置は、確実に、世界階級闘争の先駆をなしてきた。

そして、それは、それまでの国際共産主義運動の正統であったスターリン主義を批判し、マルクス・レーニン主義の原則ー世界革命・暴力革命ー旗幟を鮮明にしたものによってのみ、担われてきた。

このことは、一〇年代の我々の日々の実践によって明らかにされ、六〇年代後半の世界の激動によって、完ぺきまでに明らかになった。

世界のすべてのプロレタリア、人民が、実践的に確認してしまった。

今、スターリン主義の諸問題を一つ一つ挙げつらうことは容易なことである。

又、「労働者国家」について、一つ一つ批判することも、たやすいことである。

だが、我々が、今、応えるべきことは、ロシア革命以降の歴史的過渡性、個別性、一国性を現実的に、地上的に、如何に止揚するかを、実践的に提起することでなければならない。

我々の過渡期世界論ー前段階武装蜂起ー世界革命戦争ー世界プロ独ー世界社会主義、世界党ー世界赤軍ー世界革命戦線、こそ、六〇年代の先駆的日本階級闘争の実践が生み出した最高峰であり、それ故、六〇年代後半世界各地で闘い抜いた世界武装プロレタリアの新たな時代への指針として、世界的水準を有しているのであり、なおかつ、先進国、後退国、「労働者国家」を問わず、全ての世界プロレタリアート、人民の共通の財産に昂め上げられねばならない。

そして、理論が、真にプロレタリアートの理論となりうるのは、主体的実践を媒介にして錬獄の火をかいくぐっていった時のみである。我々は、既に、世界党ー世界赤軍建設に向けて、諸々の運動、組織を開始している。

既に米に於いては、最も革命的なSDSーウェザーマンとの、交流から、路線への一致べと、我々の一同志を米に常駐させて、組織活動を展開している。

更に、我々は多くの同志をアジアへ、米国へ、ヨーロッパへ、中近東へ、中南米へと送り出し、過渡期世界論・前段階蜂起⇑世界革命戦争の下に、世界党ー世界赤軍を、言葉ではなく、現実的に物質化させていくであろう。

とりわけ、レーニン・ロシア革命以降の過渡期世界にあっては、「労働者国家」の根拠地化こそが、前段階武装蜂起世界革命戦争の決定的環であるから、外から〝変える〟こと

を追求するだけでなく、内からも根拠地化へ徹底した組織化を行なわねばならない。同時に、それへの対応は、マルクスーゴータ綱領等々の原則のあてはめを行なう、小ブル空論主義的批判として展開させるのでなく、過渡期世界のその過渡性そのものも必然化させる、世界党と労働者国家の利害のカイ離を、革命的現実主義で止揚する方向に於いて提起していかねばならない。

我々は、前段階武装蜂起↑↓世界革命戦争の利害の下に全ての諸問題を、主体を媒介に処理していくであろう。

今度のハイジャックは、それへの第一歩である。

(4)

我々は、昨秋、前段階武装蜂起の敗北の中から〝直ちに突撃を〟と怒号するのをやめ、前段階武装蜂起↑↓世界革命戦争の主体をつくることから、まずはじめ、全てを今秋、武装蜂起に集中せよと呼びかけてきた。

蜂起へ全てを集中すること。蜂起のための闘争を行なう時代に突入したことを明らかにしてきた。

蜂起のための闘争は、党の武装から開始させられねばならない。同時に、党の武装ー党のための闘争は、又、この時代にあっては、党として の闘争でもある。

蜂起に向けて、党のための闘争と党としての闘争が一体化されねばならない。

黄色インターに転落したブント連合派は、恒常的武装斗争の時代、ソヴェト運動を結合して恒常的武装闘争に決起せよと「大衆」に呼びかけている。

これは誤りである、党が何の準備もなしに、大衆に武装闘争をそれというのは、サンディカリズムである。

党のための闘争が現時期にあっては、権力闘争として現出せざるをえないのであり、これが、党としての闘争となり、結果として恒常的武装闘争の時代になるのである。

六九年後半から、世界的に、これまでの様な敵権力に大衆をブッツけることから、党のための闘争＝党としての闘争の時代に突入しつつある。（その党の内容はどうであれ……）

ハイジャック、その象徴であり、ブラジルに於ける指導者奪還闘争がそうであり、銀行を襲撃することも、そうである。

七〇年前半は蜂起のための闘争ー党の武装ー党のための闘争に全てを集中しなければならない。

(5)

我々の、今度の、ハイジャックが、その党の武装ー世界党建設の一環であり、第一歩である。

だが、党の武装ー党建設は指導者を失くしてはありえない。

我々の、偉大な同志でもあり、指導者である塩見議長は、三月中旬に、敵権力によって捕われた。

我々は、彼の奪還を、党のための闘争の中心環にすえねばならない。

六〇年安保から六〇年代の日本階級闘争の歴史は、ブントの歴史であったと言っても過言ではない。

そして、ブント統一六回大会から、ブント七回大会ー八回大会の実質的索引者は、我々の議長である塩見同志であったことは、他言をはさまない。

塩見同志が、ブント七回大会を前に、唯物史観の領域の中で、過渡期世界論を明らかにし、客観主義、主観主義を克服した、主客の弁証法をもって、現代世界を把握し直した。

そして、その戦略ー戦術を、六八年八月三日国際集会を前に、世界革命戦争ー世界党ー世界赤軍として、全人民の前に提起した。ブントの党内闘争から、我々赤軍派の生成における揺ぎない指導的地位と、果した役割は、既に諸同志が深く確信していることである。

彼こそ、日本階級斗争が、生み出した最大の指導者であろう。

我々は、この偉大な人材を失ってはならない。

我々は、あらゆる犠牲を払っても、この偉大な同志を、敵権力から奪い返さねばならない。

彼だけでない。彼の他、四名の政治局員も、我々の偉大な指導者であり、党の支柱であったことは、誰も疑いを入れない。

又、「大菩薩」を頂点として、逮捕ー拘留されている全ての諸同志についてもそうである。

彼らの、その献身性、革命性、英雄性は、かって史上比類のないものである。

彼ら、全て、一騎当千の強者である。

彼ら全てが、我々の戦線に復帰した時、どれだけ巨大な力が発揮されるであろうか。

我々は、断乎として、彼らの奪還闘争を貫徹しなければならない。

我々は、あくまで、このことを、日本の諸同志に要請する。

(6)

我々の、世界党建設は、何も、気違教師的に世界を歩きまわって「過渡期世界論」を説教していこうとするものではない。

各国に於ける諸同志が、とりわけ、日本の諸同志が秋、前段階武装蜂起を貫徹することをもって、世界革命戦争の防御ならぬ対峙関係を主体的に切り拓く事を、その任務としなければならない。

我々は、そのことに結合することによってのみ、生きた世界党建設をなし得るのである。

今、日本に於ける諸党派は、秋、安保決戦の限界を理解しえないままに、機略的後退ー七二年危機待望へとその路線を右傾化させている。

だが、いきづいている歴は、世界党ー世界赤軍（蜂起の軍）建設をもって攻撃的に展開、突破されねばならない。

世界的闘いの波を、今見る時、ベトナム、ラオスカンボジアに於いて、中近東に於いて、全て、拡大、前進への道を歩んでいる。

その永続性が保証されているのは、正規軍が維持され、組織されているからに他ならない。

中南米の都市ゲリラも、これまでとは、全く、違った地点から開始されている。

指導部の奪還、ハイ・ジャックへと、世界革命戦争を斗える主体の建設からである。

七十年安保以降を想定し、又、量的拡大から、次への危機へというのは待機主義であり誤りである。

世界革命戦争への時期は、ますます成熟しているのであり後退しているかのように思えるのは、世界党ー世界赤軍（蜂起の直隊）建設こそが、過渡期世界に於ける世界革命戦争の眼であることが理解しえない古ぼけた頭にはそう思えるのであり、プロレタリア人民の闘いに、レーニン主義の教条にとどまることによって遅れをとっている人々にはそう思えるのである。

後退しているのは、主観的にはプロレタリア、人民を領導しようと思っている諸党派であり、世界武装プロレタリアートよりも大きく後退しているのである。

(7)

帝国主義武装蜂起は、今秋断乎貫徹し、世界革命戦争の対峙局面を切り拓かねばならない。

それがなし切れないなら、帝国主義者国のプロレタリア、人民は、たしくずしファシズムの下に、増々統合され、帝国主義の侵略ー抑圧ー反革 戦争に駆り出されていくのであろう。

前段階武装蜂起の性格から来る、その戦術は以下の通りである。

何よりも、前段階武装蜂起には、世界革命戦争の対峙局面を切り拓くこと、言いかえるなら敵権力の密集した反革命を引きき出すことにあり、過渡期世界に於ける密集した反革命とは、一国的反革命としてではなく国際的に密集した反革命として引き出すことである。

即ち、ブルジョワジーが、国民経済ー国民的立場に立脚した、国家的結合を不可能にするような事態を生み出すことであり、ブルジョワジーの階級利害を赤裸々に暴露してしまうことである。（このことによってのみ永続的斗いが可能になる。スペイン市民戦争）

したがって、その戦術は強権的に、プロレタリア、人民を中心権力に統合している以上、政府中枢権力の一挙的解体と機動隊の一挙的武装解除をもって、国家の集約力を喪失させ、同時に世界の義兵としてある米軍への攻撃を連続的に展開し、日米安保軍を実体的に引き出すことによって、日本帝国主義、ブルジョワジーのその階級的利害を全面的に引き出して行かねばならないのである。

日本の前段階武装蜂起の、実際的獲得目標は、この日米反革命を密集させることであり、日米安保軍を引き出すことである。

そして、この闘いの永続性は、世界党ー世界赤軍に媒介された、全世界のプロレタリア、人民の闘いであり、このことをもってしてのみ、労働者国家の根拠地化も、又、可能になるのである。

（8）

それ故々金輿の運動は、中枢権力の一挙的解体と機動隊の武装解除をなしうる力量をもたねばならない。

全く権力に見えない所で、組織だって活動できる能力を持つことであり、あらゆる武器を使いこなせる能力を持つことである。

この様な訓練をつんだ軍を建設しなければならない。

我々の大部分は、北朝鮮に行くことによって、それ自身を根拠地化する様に最大限の努力を傾注すると同時に、現地で訓練を受け優秀な軍人になって、如何なる困難があろうとも日本海を渡り、帰日し、前段階武装蜂起の先頭に立つであろう。

我々の大部分は、北朝鮮に新乎度るのである。そして断乎として帰ってくるのである。如何に国境の壁が厚かろうとも．．

だが日本の同志諸君！

逆に、日本に於ける、あるいは各国に於ける前段階武装蜂起が貫徹されない限り、世界革命戦争の対峙下に突入しないのであり、それ故、帝国主義の包囲下にある「労働者国家」が文字通りの根拠地下されるはずもないのであり、故に我々の帰ってくることを期待し乃至は、それを待つことを理由に、前段階武装蜂起の時期を遅らしてはならない。

それは、ただ、軍事的に劣勢な中で開始されなければならないということだけである。

断乎として、日本の同志は全段階武装蜂起を貫徹せよ！

我々が帰ってきて、前段階武装蜂起がなしうる時には、その軍事的技術の優位性に於いて、その蜂起の軍の世界性に於いて、有利な、前段階蜂起ー世界革命戦争が有利な地点から開始されるだろう。

再度、強調する。我々の大部分（世界党建設のために残る同志を除外して）は、帰ってくることに、全精力を集中するだろう。

（9）

我々は明日、羽田を発たんとしている。

我々はかって如何なる闘争の前にも、これほどまでに、自信と勇気と確信が、内から湧き上ってきたことを知らない。

我々は、この歴史的任務を遂行しうることを誇りに思う。

我々は、日本の諸同志に、心から感謝する。この歴史的任務を我々に与えてくれたことを。

我々は、我々に与えられたこの歴史的任務を、最後まで貫徹するだろう。

日本の同志諸君！プロレタリア人民諸君！

全ての政治犯を奪還せよ！前段階武装蜂起を貫徹せよ！

前段階武装蜂起万世世界革命戦争万才！

共産主義者同盟赤軍派万才！

そして、最後に確認しよう。

我々は〝明日のジョー〟である。

田宮高麿

一九七〇年三月三〇日　午後十時三〇分

田宮高麿（略歴）

一九四三年一月二十九日生　二七才

一九六二年　大阪府立四条畷高校卒業

同　大阪市立大学入学

一九六三年八月　社学同市大支部加盟

一九六六年十月　共産主義者同盟加盟

一九六九年四月二八日　革命的敗北

一九六九年八月　赤軍派加盟

決意書

六九年秋の敗北は、日本階級斗争内部に深く、大きな動揺と分解をもたらしている。帝国主義の広さと深さが実態的につきつけられ、喪がくだけたばかりか、その脆弱性を合理化する小ブルインテリの群が広汎にひろがっていきつつある。そして暴力革命・プロレタリア国際主義の旗を高くかかげ、反スターリン主義をその基底にもったはずの新左翼諸党派の目をおおうばかりの腐敗堕落が進行していきつつあるのだ。これら歴史的役割を終了し、むしろ犯罪的・反革命的作用をなしつつある老いたかよわきガラクタどもにかわって本格的で世界的な武装・世界プロレタリアートの力強き武装を準備しなければならない。かかる準備をあらゆる重圧にも屈することなくなし切る主体の登場こそが問われているのだ。つきつけられた軍事の問題を回避して革命を領導しえた者がかってなかったことは歴史が示すところである。

帝国主義段階における資本主義経済の矛盾の極限的帰結としての第一次、第二次帝国主義間戦争を経る中でロシア、中国革命がその内部から生れ出て、それによって追いつめられたブルジョアジーは、日和見主義的、小ブル的、スターリンスト官僚どもが「平和共存」路線をとる間に中ソの資本主義経済への統合を推進し、帝国主義内部、後進国の武装した人民のせん滅にのり出さとしている。この確定されつつある世界戦略にそったブルジョアジーによる強権力弾圧におじけをふるい軍事の問題から逃亡し、一般的な社会党、総評解体の労働運動路線をとることは第二日共への堕落の道であり反革命であることは言をもたない。世界的に普遍化した商品経済のダイナミックな変動と、それに規定された現体制の腐敗、その腐敗の中からの新しい胎動に無自覚なものは革命党派たりえないのだ。現状を固定的に

とらえ、それに対する革命的な主体的かかわりを追求しないような輩はくされ果てしまえばいいのだ。現状の混乱の中に未来における総体の発展をみ、それを主体的に切り開いていきうるもののみが革命党として真に人民大衆と結合しうるのだ。日共的な即自的大衆との結合などくそくらえだ。

現代帝国主義内部の矛盾を軸とした全世界的矛盾の煮つまりは、今こそレーニンを超越する世界革命主体の登場を促しているのだ。全世界人民の怨念の炎を結集し世界革命戦争の巨大な潮を創り出す革命主体の登場を促しているのだ。我々は断固たる意志と力とをもってその主体たらんとしなければならない。ワイ少な島国根性をたたきつぶし、世界革命主体たらんとしなければならない。日本における激烈な武装蜂起の赤い炎を世界的、永続的武装蜂起の導きの炎としなければならない。権力問題を射程においた闘いが全世界的に煮つまる中で、それを激発させ統合しなければならないのだ。プロレタリア国際主義の内実とはまさにかかるものであり、主体抜きのプロレタリア国際主義などありはしないのだ。

我々は、歴史の発展と、その発展の構造が資本主義から社会主義へ至るものであることを理論的にも現実的をみえないものによって現定された必然的行程をたどるものではなく客体的条件に規定された人間の自由な意志と行動によって推し進められることを確信する。「共産主義とは現実の運動であり、その運動の条件は今現にある前題より生ずる」この有名なマルクスの言葉をふまえつつ、状況に徹頭徹尾主体的にかかわり、この主体的切り開きの中に局面の展開。発展をみていかねばならない。この基本的姿勢からのみ革共同の「裏切り史観」、青解の「前衛党否定ーマルクスへの逆もどり」を超克した労働者国家における世界革命の根拠地建設ー前段階武装蜂起世界党ー世界赤軍ー世界革命戦線建設の戦略が確定されてくるのである。

労働者国家の有する階級闘争史における位置をみることなく、スタ官による支配を固定化する輩には世界党ー世界赤軍など思いつきもしないだろうし、又、世界革命をども文学通り空語としてしか聞かないであろう。我々は、かかる立場とは根底的に決別し、歴史総体の中に自己を把え返しながら、現実の政治を推し進めていかねばならない。労働者国家に我々が行くこと、そしてそこを根拠地としての軍事訓練、帝国主義内部の新左翼との武装蜂起ー世界革命戦争をめぐっての論争は、軍事性の物質化の第一歩であり、これに逆規定されて日本国内の前段階武装蜂起へむけての準備も可能となるのである。

今や蜂起の時代である。蜂起にかけて一折が準備されねばならない。この前段階武装蜂起を媒介としてのみ労働者国家をも巻き込んだ階級闘争の世界的対峙段階への移行が実現し、生き生きした世界武装プロレタリアートの結合＝世界赤軍の建設がダイナミックに具体化していくのだ。しかし、逆に又、国際根拠地建設が現在時点からなされていなければ武装蜂起も貫徹し切れないのである。かかる関係をはっきりふまえつつ今、我々は飛ぼうとしているのだ。あらゆる意味での飛躍が、この闘争にかかっているのだ。

全世界のプロレタリア諸君々闘いの火ぶたは今まさに切られんとしている。なまぬるく汚濁した黄色い腐敗を一掃する世界革命戦争の火ぶたが切られんとしているのだ。新たなる生き生きとした人間関係、社会的諸関係をその内部に生み出す世界革命戦争の赤き炎が燃え上がらんとしているのだ。

ブルジョアジーを世界的に打倒しつくす権力闘争の嵐は、腐敗し硬直したブルジョア的人間諸関係を打ち砕き、新たなる人間と人間との関係、資本主義経済に規定されない諸関係を創り出すのだ。これこそ共産主義へ至る真の過程であり、社会主義経済、新しい学問、芸術の創造過程なのだ。現時点において革命の内容を云々し軍事を回避するものの限界性と腐敗頽落は必定である。

全世界のプロレタリア諸君々ともに闘おうではないか、民族を越え、国境を乗り越えて闘おうではないか。ブルジョアジーを打倒し商品経済にがんじがらめにしばりつけられ腐敗硬直した現代世界をたたきつぶす闘いに決起しようではないか。新しく生き生きとした社会的諸関係を生み出す闘いに旅立とうではないか。

革命の赤き炎を眼前にして今我々は決意する。世界史上未曾有の闘いの火ぶたを切らんと。過去の汚濁を洗い流し、焼きつくし、その闘いの中から人間が生産を支配し、各人の自由が万人の自由の条件となるような社会実現のために生命を賭して闘い抜かんと。

明日の羽田は青く晴れているだろう。青き空、青き海に一直線にのびた白色の翼は、我々の未来の赤き斗いをのせて飛ぶだろう。

権力の重圧に屈することなくブルジョアジ社会の重みに耐え怨念の炎の燃えたぎる革命のルツボに向かって突き進むであろう。

全世界プロレタリアートの武装万才々

世界革命戦争万才々

一九七〇年三月二十五日

《ファシズム論》

(一) レーニンの限界

第一次大戦における露帝の敗勢は、人民大衆のえん戦感情と、戦争の遂行による大衆の日常経済条件のひっ迫化＝経済闘争の激化（二月革命は、この二要因から生じた大衆の自然発生的闘争であった）を生み出した。しかし、ブルも戦争の遂行により、この大衆の要求に譲歩し、要求に応えるだけの余裕はなく、権力を維持するには、常に大衆闘争に対して、暴力的対決しかできず、しかも、この暴力装置（＝常備軍）が、また、長期にわたる戦争により、完全に疲へいしていた状況においては、もはや、ブルの統御にはなく、最終的秩序維持として機能することを拒否したため、大衆の経済闘争に大幅に譲歩せざるをえず、二重権力状況を許した。

後段階においては、ブルは、大衆の経済闘争に応えるべきものを保有せず、単に、暴力装置のみが、体制維持の機能を果してくれるものである以上、これに対して、ブルの暴力装置に圧倒するプロの武装、そして徹底した武装闘争による確固たるプロの利益主張により、権力奪取は可能であろう。事実、十月蜂起は、これを実証した。ブルに譲歩の余地がない状況下においては、大衆を一国的に組織し、それを蜂起＝権力奪取にむけての意識性を与えていくこと、党は一国プロの利益の代表であり、社民はその中途半端な、ブルと経済要求においても妥協し、プロの利益を徹底してブルに要求しないものであること、真の人民大衆の利益の代表者はボルシェビキであることを、社民の裏切りの暴露を通じて、大衆に訴えていくこと、即ち、ボルシェビキを社民左派的党であることだけで十分革命党の役割を果しえた。即ち、徹底した経済闘争の展開、そして大衆をそれによ

った組織し、その団結形態＝ソヴエトを建設し、それを最終的な権力機関に発展させていく意識性だけで一国的権力奪取は可能であった。

だが、十月蜂起によって労働者権力を樹立してのち、帝国主義戦争は終り、戦後の危機を乗り切り、それなりに秩序を回復した、国際ブルが連合して、ロシア革命の破壊に起ち上り、一国的権力維持すらが困難性をもつにつれて、レーニンの限界性は明確になってくる。確かに、レーニンは幾度となく、ロシアにおける社会主義は西欧の革命を度外視して建設することは不可能であることは述べている。だが具体的にいかに西欧革命とロシア革命は関連するか、その革命戦略は打ち出せえず、ボルシェビキをロシア革命の前衛党としか位置づけることができず、それ故、ボルシェビキはロシア人民の利益の代表者でしかなかった。レーニンの世界戦略は、一国権力奪取の総和としての世界革命であった。だが、歴史はレーニンの限界をあますところなく暴露する。例えば、独帝の敗北による独人民の決起。（これはまた、露革命の成功が、人民の自信を与えた重要性は忘れてはならない）この独人民の決起が、独帝の戦争遂行を困難にし、独帝をロシアとの隔和を早急に結ばさせるわけだが、ボルシェビキは世界革命戦略を有していなかったが故に、実践的にも独革命と関係せねばならないという局面において三分解せざるをえなかった。レーニンの限界は世界革命戦略から逆規定されたロシア階級闘争の指導、否世界革命戦略を保有していず自然発生的なロシアの革命戦略にあった。歴史は常に意識した部分すら自然発生性を保有していることを教えてくれる。我々は、レーニンの限界（＝世界革命戦略の欠如）を乗り超えなければならない。

後段階においては、党が世界性を獲得していなくても、徹底した経済闘争の延長上に権力奪取は可能であることは以上述べたことで明らかになった。レーニンの限界は、この歴史的制約による、党を一国プロの利益の代表者と位置づけ、世界革命戦略においては、二段階革命戦略しか打ち出せなかった点にある。二十七年スターリンの二段階革命戦略の源は、このレーニンの世界革命戦略の欠如にある。

(二) トロッキーの前段階決戦に対するレーニン革命論の無媒介敵応

(1) また前段階においても、確かに、恐慌による経済秩序の崩壊が経済闘争の激化をもたらし革命攻勢を引き起す。だがブルは未だ政治権力を掌握し、この恐慌からの脱出策を真剣に追求し始める。確かに、経済秩序の崩壊により、生産は激減する。しかし生産設備は完全無欠のままで存続しており、秩序の回復によって恐慌直前の生産水準までの回復は可能であるという客観的要因は存在している。（後段階における生産設備の全滅状態、そして戦争の遂行による軍需関係への設備の偏在を比較せよ！）秩序の崩壊下（＝恐慌）では、確かに、経済闘争は激化し、三十年代仏ブルのように、プロの経済要求に対して、その生命であるとすらいえる所有権の放棄すらあえてやるまで譲歩し、プロの生産管理権（＝ソビエト運動）まで飲むようなことすらあえて行なった。だが、恐慌下での経済闘争もまた、工場閉鎖、解雇反対であり、その極限形態である工場管理までプロの要求が受容されたとしても、全体の経済秩序が回復されない限り、その生産物自身の市場は創出されない。即ち、プロ自身に新たな経済秩序を要求されているのである。これは同様にブルにもいえることであり、ブルも、新たな秩序回復策を打ち出すことによって恐慌直前の生産水準まで生産物を高めうるのであり、プロの経済要求に十分応えうるのである。この恐慌からのブル的秩序回復策がファシズムである。即ち、ファシズムとは恐慌からの資本主義的脱出策である。

恐慌からの脱出策をブルは保有しており、それによって、恐慌下でのプロの経済要求を十分満したのである。即ち、経済闘争の徹底化の延長上には、権力奪取はありえないのである。レーニンの限界を乗り越えることなく、後段階決戦における革命論を、ロシア革命の二度目の成功を夢みて、柳の下の二匹目のドヂョウを探したのがトロッキーであった。

(2) トロッキーは二十九年恐慌を資本主義の崩壊であると見なし、激化するPrの経済闘争にすべてを託し、ブルの暴力装置に圧倒するプロの独自の武装や建設を主張する。だが、ブルは、それ迄りに、恐慌からの脱出策を未だ保有しており、このトロッキーのプロ武装論だけでは決定的に不十分であった。

ファシズムは、プロが武装解除されたのちの政治形態ではなく、プロの利益がファシズム下では、完全に侵害され、ブルの利益が全面的に開花するものでは断じてなく、プロの経済要求を十分満足させうることにより経済闘争を押えこむが故にPrのはむしろ自ら武装解除するのである。前段階においては、このブルの恐慌からの脱出策を明確に確認し、これをプロ国際主義の観点から、徹底して批判し、この脱出策の策略を大衆に直伝し、啓もうしていくべきであった。

(3) 二十九年恐慌は、米のウォール街の株価大暴落を直接的契機とした金融恐慌、即ち信用の世界的崩壊をもたらし、信用による世界分業（＝貿易）の激減をもたらした。また、第一次大戦のもたらした、米帝から圧倒的な生産力、生産構造の優位、そして戦災による生産設備の壊滅的状態から出発した独帝。このような状況において、独帝は、米帝からの最新の工業機械の輸入により工業生産力の回復を計っていく。これが完了するのが二十五年前後である。これ以降、独帝は、その最新の生産設備によりむしろ米帝と独帝は市場争奪戦を展開していき、相互の帝国主義者は抗争の様相を強めていく。レーニンの「不均等発展」はまたも、歴史が証明してくれる。

二十九年恐慌までに、独帝は海外市場を前提にした工業生産力を備える（＝自由内市場を上まわる工業生産能力）わけだが、不均等発展による列強間対立、抗争の激化の一様相である相互信用の崩壊（＝金融恐慌）は貿易による海外市場との商品流通を当然にも、途断させてしまう。この世界貿易の途断が、商品の過剰をもたらし、工場閉鎖、解雇等による生産高の縮少をブルに迫る。だが、これはまたプロの反撃を招き、早急な生産力の回復をブルは必要とされる。世界市場を前提にした生産力である以上、新たな世界分業が確立されるか、それとも、独自の市場創出によってしか、この恐慌による市場縮少を回復することはできない。

二十九年恐慌は(1)国際信用の崩壊＝世界貿易の途断(2)自国市場を上まわる過剰生産物の存在の二要因からとらえなければならないが、ブルは、恐慌による生産物の低下を(1)海外侵略による市場拡大の追求(2)自からの市場創出により生産量の低下からの脱出を追求していく。このような政策を遂行していく政治形態がファシズムである。トロッキーは三十年代ドイツプロの敗北を、プロの動揺した武装闘争の展開、そして指導部の一国権力奪取への不決断、それに反してのファシズムの確信をもった武装闘争の前に軍事的に粉砕されたことに原因を帰した。確かに、トロッキーのプロ武装闘争は一般的には正しい。軍事力を保有しているブルは最終的にはその暴力装置を発動するが故に、プロも武装しなければならないと

いうマルクス主義の初歩においても。ただ、それだけのことである。しかし、武装プロの革命論的役割においては、決定的な誤りを犯した。

ブルは恐慌からの脱出を、海外侵略＝徹底した自国国民の利益の主張を提示してくるわけだが、これはプロの経済要求を充分充足させてくれるものである。

三十年代前段階決戦は、プロの国際主義とブルの国家主義との激突であったのだ。ブルがそれなりにブル的恐慌脱出策を明確に提示してきたのに、世界プロの統合を計り、社会主義のみが、社会主義だということを一九〇五年永続革命論では述べていたにも拘らず、その連続革命論からくる一国権力奪取の延長上に世界革命を展望した、世界革命戦略上の欠陥により、トロッキーは、プロをむしろ一国権力奪取にむけて組織化を推進し、その当時、世界の人民が連帯してナチスを非難していたにも拘らず、それの統合を計るべき努力を払わず、放置し、一国的プロの利益を代表するものとして党を位置づけた。

即ち二重の誤りを犯した。

(1) ブルの脱出策に対してプロの脱出策を提示しなかった。

(2) (1)と一体であるが、三十年代の世界プロの統合が即自的な形態（ファシズム運動）を放置し、その統合を計る努力を怠った。

このようなトロッキーの中途半端な国際主義が、結局、スターリン主義を残存させ四十五年～五十年後段階決戦をも敗北に導いていくのである。戦争による以外、恐慌から脱出することのできなかったブルは、結局、それが、より強大な、プロの反抗を招き窮地に追い込まれるのを四十五～五十年に思い知らされる。戦争の遂行による、資本の破壊、生産設備の偏在は、もはや、大衆の経済要求にすら譲歩することも不可能となる。

プロの要求にはすべて応える覚悟ですらあった。だが、ここに未だ、帝国主義者どもの救世主ば存在していた。即ち、一切の危険を冒すことを拒否し、自分の権力維持にキューキューとしているスターリン主義官僚共である。暴力による世界解放を追求せず、話し合い（これは危険を犯さないものである）による譲歩を乞い願うスターリン主義の残存を許したのは、まさにトロッキーの前段階における誤った中途半端な世界革命戦略であった。

(4) 何故に、第四インターは伸張しえず、むしろ衰退しているのか？第三インターの変質をスタの性格に求め、第三インターの限界を止揚したものとして第四インターがないからであり、単に第三インター批判（むしろ逆義的な非難に終始）としてしか意味をもっていないのも、当然の理であろう。レーニンの限界を超えることができず、一国革命の延長上に世界革命を展望し、（これは確かに後段階においては、一国的権力奪取を可能にする）前段階の政治状況を認識しえないが故に、ファシズムに対して、有効な戦術を提起できなかった。

(三) WP－WRG－WRFのもと

帝国主義の侵略反革命戦争をWRWに転化し、Wプロ独へ

我々は、レーニンの限界を、組織論において止揚した一WP－WRG－WRF一を定立する。まず第一に党は、断じて、一国プロの利益の代表者であってはならず、世界より規定された世界プロの利益代表者でなければならないし、同時に世界革命戦略から規定された各国階級闘争を各国の歴史的場所的特殊性

を考慮に入れた各国革命戦術を提起できるものとしてなければならない。

第二に、前段階においては、ブルは資本の矛盾を強力的に、対外侵略として解決しようとして、プロを各国的に分断し、プロをその経済闘争の延長上に、排外主義的に包摂する故に、我々は一時的な経済闘争の激化を決して、経済闘争の組織化一般に終ることなく、むしろ帝国主義の解決形態＝対外侵略を徹底して暴露闘争として展開し、同時に、平時からの、ブルの排外主義的政策に抗して、プロを世界的階級へ組織するための戦術として、WRGの活動を展開していかなければならない。

我々は、帝国主義国下の大衆に対して、世界プロ独か侵略・反革命戦争（＝ファシズム）かの選択を現在から、迫っていくであろう。

世界社会主義は、一国権力奪取ののちにおいて、いわゆる国家の消滅があるのではなく、現在から国家の域を突破したWPに領導されたWRGの中に準備されておかねばならない。

ボンド切り上げ、マルク切り下げ、ドル危機、金二重価格制はすでに金融恐慌の前徴を示している。また、列強諸国の過剰生産物のかかえこみは、対外侵略の強権的遂行、列強間対立の激化、また、米国本土における反戦闘争、経済の軍事化は、大衆の日常経済における貧困化を招き、経済闘争の激化は米帝の侵略反革命政策の遂行を困難にしており、世界経済は世界恐慌への道を一直線的におち込んでいる。ブルはプロを一国的に包摂しえない限り、本格的な侵略（＝反革命）を開始できないのであり、それは、恐慌を経過したのちに本格的に、プロに侵略戦争による日常経済の保障をつきつけることによって可能なのである。

戦後世界資本主義が、行きづまり、ブル自身が、経済のなしくずし的統制経済により、平時から、その打解策を推進し、プロを各国的に分断すべき策動を展開し、かつ、現代矛盾を後進国大衆に集中的に押しつけることによって、一定程度、矛盾の爆発を回避している以上、我々は、この延長上に本格的侵略・反革命戦争を予期できるし、現在的にこれに対する粉砕闘争を展開していかねばならない。

我々とともに、小ブル反スタ主義者どもと徹底した、根底的な党派闘争を展開し、ともに過渡期世界としての現代世界を変革したにもかかわらず、その理論が、実践的にも要請される時点に突入した途端、再び、卑少な、小ブル反スタ主義に転落しつつあるブント諸君がいる。彼らは我々に対して、現在のプロ国家においては、全面的に、スタ官僚の支配あり、プロ国家における大衆は武装解除されており、根拠地化は不可能であるという没主体的悪しき、待望論におちこんでしまった。

我々も、決っして我々のプロ国家出発が即刻プロ国家の根拠地化を達成できるとはつゆ思ってもいない。先進国における侵略粉砕闘争と同様、否それ以上の困難なことであることは熟知している。もし、我々のオルグだけで、プロ国家を根拠地化できるものであるのなら、スタ官を打倒できるものなら、また、我々は説得によって、帝国主義者どもから、政権を交代してもらえることも可能であるだろう。我々は、現在のプロ国家指導者に説得だけでその現在的役割を果すように動き出させることができるなどの幻想は一切もっていない。

だが、プロ国家にも、心ある大衆が存在しており、我々の革命論は必ずや、大衆を動かすことができるであろうことを、大衆に深く訴えるものであると信じている。かつ、列強の侵略の対象としてプロ国家があり、ふだんに列強の侵略にさらされており、本格的侵略戦争においては、体制間戦争的様相でそれが展開されるが、先進国大衆と、プロ国内大衆との分断がまず、その前提にならなければならないが、これは、相方の結合によ

『へ決意

作秋前段階蜂起の貫徹できない中にあって、再び、生産点主義一国性、経済主義への潮流が、言葉としての国際性を体現できないが故に、現実には排外主義への道を進み、市民社会の右からの分解は、進行している。過渡期世界に於ける階級闘争は、根拠地を持った階級闘争として、プロレタリアートの国際主義を、世界革命戦争の始めから目的意識的に実体として獲得しうるし、そうでなければ、ブルジョアジーの高次な抑圧反革命に勝利できない地点に到達した。労働者国家が帝国主義に包囲され不断にスターリン主義等の形で、プロレタリアートの弱さが表現されている中では無媒介に労働者国家の根拠地化を叫ぶ事はできない。反スターリン主義や外国権威主義の理念の中の世界に於けるそれの拒絶や、盲目的賛美は、およそ、実体化できない不毛の理論でしかないだろう。根拠地国家が根拠地たり得るのは、前線との関係に於て、前線の闘いが、集中して闘かわれる場合のみ、後方としての役割を果す事ができるだろう。ベトナムに於ける闘いが南に於ける、戦闘が、非妥協的に継続されてのみ、北の根拠地化が意識的、無意識的に獲得されていった。今、キューバが、中南米の根拠地化に応えきれないで、その路線を、砂糖キビ路線に、文化大革命で紅衛兵が先験的にプロレタリアートの未来を示そうとした中国で、再び、右派が復活を見せ、世界革命派が後退している。昨秋日本プロレタリアートの前段階蜂起の敗北を始めとして、ブルジョアジーの、反革命攻撃、労働者国家への融和政策は全面展開されようとしている。それは、前線自身の要求のみならず、根拠地が根拠地たり得る闘いとして、労働者国家が要求する闘いでもあるのだ。この全世界のプロレタリアートの闘いを統合する環こそ先進国

って、ブルの解決策を粉砕することになるのである。我々が、根源的であれば、我々は大衆を獲得することができるのである。（すべては、まず、第一歩から、開始されなければならない。）

に於ろ、前段階武装蜂起でなければならない。根拠地の拡大から、世界プロレタリアートの武装でもって、前段階蜂起を、今秋日本に於ける前段階蜂起を貫徹せねばならない。今、世界に飛躍する事によって、理念の世界の国際主義から、地上のリアルな国際主義へ向かおうとしている。そして、こうしてのみ、根拠地とそれに媒介された、実体としての国際主義を全人民の前に示す事ができるだろう。我々は軍事の技術を獲得せねばならない。今秋の蜂起を圧倒的に貫徹する為に、我々は一切の活動を蜂起に向け、獲得するだろう。市民社会を我々の手で権力問題で、分解し、世界革命戦争を勝利し抜く為に、その為に、今、国際根拠地活動を断固としてやり抜く決意である。

世界赤軍として生き抜く

日本の真摯なるわが同志、兄弟諸君！いま我々、十数名の赤軍兵士は、真しく世界赤軍、世界武装Prの国際軍としてこの日本を離れ、Brとの戦争をあくまで主体的に（Pよりヘゲの下に）闘い抜き、真に世界Prと実体的に結合するインターナショナルなPrの戦場へと自ら赴くものである。いまや、従来言葉として、もしくは、一般的、抽象的理念、概念として在った「Pr世界革命」「Pr国際主義」はかかる抽象領域に在ったそして現実世界の檜舞台では「未熟児」として常に謂ゆる概念の領域でしか登場し得なかったところの「胎児」がいまや数限りないPrの赤い血を授けて、世界の子として、現実の我々のものとなりつつある。真の人類史へと流動を開始しつつある現代過渡期世界は、客体的にもかかる理念を現実のものとしつつあるし、根底的流動を内包（或いは部分的、崩芽的に顕在化）している。亦、そうであるならば、この現在の飢餓的現実を我々は人類が営々と築き上げてきた我々の理念にまで、我々自身の手で昂め上げ、それを物質化し、そしてそれに自己を関わらせねばならない。まさに、今、決定的に問われているのは、優れて実践的な、かかる地平への我々自身の生活、歴史への途を拓かんとする各個々人の主体的な切り込みである。真に「言葉を我々のものとすること」「観念の領域より解放すること」である。お謀べりは謀べらせておけばよい。彼らは主体的人類史の深淵、その緊張極まりない実践領域への恐怖の合理化として、あらゆる条件の困難性を並べたて、字面のいい御託を滔滔と並べたてることでお茶をにごすであろう……。かのスターリンニズムの悪しき歴史がそうであったがように……。我々が用いる「主体的」という言葉（それはまさしく「言語」であって、「言葉」ではない）を「主観的」と読み込もうとする人達にはただ

次の事を確認して於けばよい。即ち現在の階級闘争は我々自身の世界観亦、それに向けたより有効な戦略に導かれた主体的、攻撃的実践（人民の生活の人民による制覇権）抜きには、我々のものたる生活、思想、否、実践すらもが、それが現世界の抑圧者、Brにとっては単に政治操作対象的エピソード、亦は彼らの教訓的記事にしかすぎず、せいぜい狂言廻しを演じさせられるのがオチである。幾多の犠牲の上で現在階級闘争は、我々が生き且つその為に闘うのは我々が抑圧者の舞台で猿廻しを演ずる為ではない。我々が、相互の「協働」によって如何なるものの拘束物、独占物でもないところの創造的生活を獲得することである。それこそが、いままで「愛」「人類共同社会」etc.なる概念で語られてきたところの大自然の生命の燿の人類生活的表現である。我々はそれに関わり得る限り、悦んで生き、闘い、且つ死んでゆけるだろう。

いま、我々が具体的に為すべきは、人間相互の創造的人類史の、世界社会主義に至るその意味でも真しく過渡期世界の流動的階級情況、そしてその一定程度の混迷を我々自身の思想を体現し得る者が身で以って、現代世界の抑圧者、Brの現在遂行しつつあり、且つ新たな搾取、抑圧に向け準備しつつあるところの戦争、Br の危機の擬制的解決形態であると同時にPrの抑圧体系を完成する帝国主義戦争（体制間戦争）を、亦その動向を、未然に「防止？」するのではなくして、それに対しそれを根底的に止揚し得る我々Pr自身の生活を獲得すべく、それこそ人民が世界を獲得するための闘い、そしてそれは取りも直さず世界革命戦争を、断固我々自身の戦争を我々自身が組織し闘い抜くことである。そしてその為に我々が早急に具体化を迫られているのは、政治的軍事的勝利を獲得すべく、その最高委譲たる先進帝国主義国内部に於ける計画的蜂起を準備し、それと相互補完的、同時一体的に在る労働者国家の武装国際根拠地化を克ち取り、世界革命戦争の政治的、軍事的統合司令部を獲得することである。それはとりも直さず〈世界党〉そしてそれに領導されたまさに民族、国境を越えた革命の軍隊〈世界赤軍〉そしてその地下組織〈世界革命戦線〉に物質化されねばならない。そしていま、まさに現在の世界Prの闘い（先進帝国主義国の「蜂起」の萌芽的武装闘争、いわゆる後進国民族解放闘争、労働者国家のスタ官支配に対する闘争）を組織し、計画的、実体的に結合し得るような階級闘争の地平こそ我々は切り拓ねばならない。それこそ新たな世界階級闘争の質なのだ。そしてそれが物質化されたときあらゆる人民とその最深奥部での真の結合は為し得るだろう。

我々は国境を越える軍隊として現実的に労働者国家へ積極的に介入し、その流動化、国際根拠地化と相互媒介的に今秋日本の「前段階蜂起」を担い、そして亦世界Prとして米ー西欧、労働者国家、後進国世界のあらゆる戦場に新しい世界史をブッ放す銃を肩にその重さに堪え得る質を獲得してゆくであろう。この世紀の現在に生を受けた我々は今階級闘争としての世界Proとしての「自由」をこの過渡期世界での自らの決定権を革命戦争に自らを賭らせ、よって以て世界Proと実体的に結合の環を切り拓くことによって見出す。

我々は断じて生きる。たとえそれが人類の生活史の一片であっても……。生きて生きて生き抜く。例え吾が個的性は破壊されても……。私の生が人民に転化、吾が生の炎が人民の深き怨念に点火し人民の生と一体化したとき、私の生はより大きな「愛」「人類史の創造」という「愛」に育くまれ、生き抜くことだろう。寂滅と隣りあわせのチッポケの「愛」なぞ糞食らえ！私は断じて生き抜く、断じて！　一九七〇年三月二十一日

勝利か、さもなくば死を！

兄弟達！

今沈黙し主体的に動くのだという名目のもと個と社会を分断し正当化することは、共産主義を志すものにとって犯罪であることを知ろう。今の世界革命戦争の成熟は、ひっしと我々により、革命論の深化と主体を媒介にした闘う戦場としてのみあり、それは世界的普遍的な実践能力をもって答えること抜きには、お話しにもならないのである。世界的規模での混乱と不満、不平、堕落は重大な、事実の結果である。歴史は今こそ一時の猶予も許すことなく、世界党・世界赤軍・世界革命戦線の登場と、それによる全世界の階級闘争を世界革命戦争の勝利に向け防御ー対峙ー攻撃に止揚することのみ要請しているのだ。そしてそれは数時間中の果敢な我々の行動を出発点に切り開かれんとしている。歴史上の数々の貴重な教訓を唯一実践的に血肉化した我々は必ず貴重な成功を約束しよう。蜂起の時代のみ許容される猛勇という英和を、精神的優位性を唯一たのみの綱に大胆により大胆に貫徹し、戦場に於いて必ずや真の連帯を勝ち取ろうではないか。もはや一歩も引くことの出来ぬ地平では、勝利するか、しからずんば、死ぬ以外にはないのであろう。

兄弟達！親愛なる兄弟達！

世界党ー世界赤軍ー世界革命戦線に結集せよ、重大かつ決定的な前段階蜂起を準備せよ！そして数知れぬプロレタリアートの真紅な血に汚れた全世界の抑圧者に対し、砲火を砲火をあびせよ！

暗い夜の影につつまれ政治嫌いな私であるが故一点の迷いもなく誇りと気風をもち世界赤軍として決意しこの歴史的行為を決行します。

暗黒の世界にとって日の出はもうそれ程遠いものではないのだ。

決して、決して……兄弟達！

〈日本の人民の皆さんへ〉

人類の歴史が始って以来、様々な屈折を経てきた。それは一つの階級が他の階級を抑圧するという階級的社会に他ならない。しかも、その血みどろの闘争は、民族という表現をとって様々な形態、土壌を作っていった。日本に何があろう。どれだけ真剣に生きえたか、人民の心に接し、かつそれをどれだけ応え、又は変えようとしたのか！そのような無数の目に見えない闘争が必要だったのだ。おそらく、日本に於っても、小数の苦闘しつつ倒れていった人達はいたに違いない。我々は只その闘いを受け継ぐだけだ。典本ファシズムが、東北の最も収奪された農民の心と一体した陸軍士官らによって表現されたなら、我々は、世界の最も収奪されてきた、そして立上ることによって一層悲惨な現実に直面しているアジア・アフリカ・中南米の人民に／そして労働者階級一先進国での人民と／自らを世界武装プロレタリアートの一兵士として最初の〈意識的な〉実践を歩むのだ。

階級的社会の未曾有のブルジョアジーとプロレタリアートの攻防戦、世界革命戦争を経てこそ、（その中でアウシュビッツ以上のことが為されるだろうし、一切の関係がその変革を問われ、又、何億との人間が死んでゆくだろう）やっと人類的社会＝世界社会主義、（人間が人間として生きかつ死ねる。）にたどりつくことができるのだ。一切の問題が我々自身の成熟として問われているのだ。

ブルジョワジーに強奪せられて、体制間戦争として、中国や朝鮮やベトナムの人民に銃を向けるのか、それとも、国際根拠地として、労働者階級や解放戦争を担っている人民と結合して帝国主義心臓部に於ける〈蜂起〉を担い、世界革命戦争の合い図とするのか、我々がどこまで世界党＝統合司令部、武装国際根拠地、国際地下組織、蜂起の軍隊を実体化し、計画的に〈蜂起〉を政治的、組織的、軍事的武装でもってやり抜くか、その実践が問われているのだ。

個々の生と死が何になろう。私は人民の最深部にある脈々とその流れを受け継いできた「鬱哭」につつまれて、先き抜くだけだ。

一九七〇年　三月二十二日

赤い銃で世界をかけ巡れ！

現在、帝国主義がその帝国主義的再編を、ますます、社会末端まで強力に推し進め、七二年の沖縄返還を一応のめどに、その完了を成さんとする現時点において、我々、左翼は、その完了が、侵略と、抑圧と、反革命のよりいっそうの強化の歴史の始まりとしてあり、逆に言えば、帝国主義の矛盾のより一層の深化としてあるが故に、まさに、真の人類史の開始の時であることを知る、我々左翼は、どの様な対応をせまられているのか。

とりわけ一〇／八羽田闘争において、世界武装プロとしての原初的形態を体現した、所謂新左翼諸潮流においてはどうなのか。それは一方では、その原初的武装を質的に、意識的に発展させることをせず、その限界性そのものを、武装、即ち、世界武装プロ、そして武装プロとしてあらねばならぬ自己に対する嫌悪なり、ためらいとして、あるいは不信として、従って極めて没主体的にプロの武装の問題を回避する部分を生み出している。そして又、一方では、世界武装プロ、とりわけ、過渡期世界における、プロの武装を、それなりに理解しながらも国際主義の意識的のみの把握、結局、一国主義への転落として又、思想性の不充分性の故に武装の質的昂揚を不問にしたまま、自己の〝党〟派としての限界を克服することの出来ぬまま、大衆の自然発生性に完全に拝キしたままで、その自然発生性のラディカリズムに乗っかることにより、かろうじて、したがって大衆追随主義的に、操作主義的に、〝新〟左翼としての面目を保っているにすぎない、軍事力学主義者を生み出している。

我々は今、我々に課せられている任務をプロの本質性としてある、世界武装プロとしての武装の質と、プロレタリア国際主義としてのプロレタリア国際性の実体化をいかにして勝ち得っていくのかの問題として提起されているのであり、その事のための現実の行動であると考える。

あのベトナム革命戦争を結節点とした、六〇年代後半の世界各国での革命闘争、とりわけ、日本の反安保闘争、仏の五月革命、西独の非常時態法反対闘争、米合衆国での黒人武装反乱ＥＴＣが、ギ制的ではあれ、それなりの国際性と武装性を伴いつつ昂揚を見せたにもかかわらず、今や完全な後退局面に入っているのは何故なのか。我々はこれを、主体の側の、実体としてのプロレタリア国際主義の未獲得、世界武装プロとしての武装の質の未獲得とする。

客観的に言えば現代の資本主義の経済の好況局面と、それによるプロ意識の未熟、社会排外主義の浸透等々あるかもしれない。だからといって主体の側は、恐慌革命論、反スタ運動論、プロ意識高揚の為の観念運動を言っても意味がないのである。我々は、現代との過渡期世界において、以上の待期主義、観念主義を言っても何ら、事態の進展と、共産主義運動の真の展開とには、何ら関係はないということを断言せねばならない。

まさに、共産主義とは、現実の運動そのものなのであり、現実につきつけられているのは、資本の各国ブロックに分断しつつプロを支配する、彼等の支配体系、戦略に我々の戦略、プロレタリア国際主義をいかに実態化していくのかであり、まさに観念としての国際主義から、現実の国際主義へといかにこれを実体化するのかが、そして又、彼等、ＢｒのＰｒに対する支配の為の強力な武装に対して、世界武装Ｐｒとしての我々が、より高次の武装をいかに、為しとげていくのかが問われている。

そして以上の二点を現実的に遂行していく上での環が現代過渡期世界に於いて本質的にある、プロ独国家の世界革命戦争の為の武装根拠地化としてあるのであり、帝国主義での前段階武装蜂起としてあるのである。我々は以上の武装根拠地の建設と、前段階武装蜂起を同時一体的に遂行し、それを第一歩として世

界党ー世界赤軍ー世界革命戦線を準備しつつ、その指導の下、全世界での武装根拠地の建設と、無数の前段階武装蜂起を通じて断固世界革命戦争を遂行していくだろう。全世界で全ての抑圧された人民が帝国主義に対する闘いに立ち上っている、ヨーロッパで、アフリカで、南米で、アジアで、中近東で、合衆国で、東欧で、現実の矛盾、抑圧に対して斗うことは正当であり、必然である。全世界で我々の兄弟があらゆる困難にもめげず、赤く燃える血潮を身体中に巡らせ、生き生きと闘っている。自然発生性に各地で蜂火は上がっている。しかし、それが自然発生的であるが故に、彼等は痛烈に指導を求めている。それは、日本でもそうなのだ。六〇年代後半の日本の階級闘争が行きづまった原因は何か。大衆は指導を求めている。それもプロレタリア国際主義と世界武装プロとしての質を内包し、かつそれをより質的に高めんとする指導を。今や大衆の自然発生性に挑戦し、大衆運動の延長上に武装を考える欺瞞的な潮流は、完全な大衆の裏切りである。我々は、全ての人民と全世界の人民と固く結合するために全世界に飛ぶだろう。そして決死で、国際武装根拠地建設と前段階蜂起を貫徹するだろう。たとえ我々が少数であろうとも、いかに、このことが困難であろうとも、歴史の必然を知る以上、何も恐れることはない。我々のこの小さな生命が歴史の中に生きることが出来るとしたらそれでいい。それ以上の何も言うことはない。

日本の兄弟達、全世界の兄弟達、我々は全世界をかけ巡って、真の人類史の開始の為に闘うだろう。我々の赤いバトスのシンボルの赤旗の下、全世界で、人類の敵、帝国主義に最後のとどめをさすために共に銃を取ろう。たとえ、我々がたおれようとも、我々は、不滅である。必ずや全世界の兄弟達が我々のシカバネを乗りこえて進むだろう。真の人類史の光明が、今はかすかにしか見えない光明がやがて全人類を照らす時まで我々は目を閉じないだろう

もう時間が無い先に行く！

○世界革命戦争の勝利万才

○世界党ー世界赤軍ー世界革命戦争万才！

ソウルからの闘争宣言

全世界のプロレタリア人民諸君！

日本のプロレタリア人民諸君！

国家。民族の現実の壁のぶ厚さと、その重圧をひしひしと感ずる機内にあって、我々のこの闘争、文字通り我々の、そして階級闘争総体の飛躍をかけたこの闘争に関する若干の闘争宣言を記しておきたいと思います。ブルジョアジーによるワイ少なデマゴギーが乱れとぶ中でこの闘争宣言は重要だと思います。

三月三十一日午前七時一〇分羽田発福岡着の日航機において我々赤軍派同志九名が遂行したいわゆるハイ・ジャックは南朝鮮ソウルへの不時着（一般にはそう報道されているに相違ない）によって予期以上の国際政治を引き出している。緊迫し、混迷した国際政治への我々の主体的切り込みは、局面の流動化を引き出さずにはおかないのである。

現代帝国主義国家内部での労働運動の全くの経済主義、排外主義への転落、帝国主義労働運動への変質と、労働者国家におけるスターリニスト官僚の堕落、日和見主義。一国主義の論理化、かかる中で表面的には運動は停滞しつつも、その増大する内部矛盾が大きな流動の可能性を生み出していっている。そうであるが故に、武装の問題を党が目的意識的に追求し、それを全世界的に統合することが最も鋭く問われている段階こそ、現在であり、上記の客体的与件に我々が主体的に攻撃的に切り込む以外にない攻撃型階級闘争の時代こそ現在なのである。

そして、この階級闘争の質は、世界的階級闘争史の最終的段階が現在窮極的に煮つまりつつあるのであり、その中における、労働者国家内部の動揺・分解と現代帝国主義における帝国主義の法則（過剰生産・市場分割戦・帝国主義間戦争）の不貫徹とそこから生じる内部矛盾の増大、後進国への矛盾の集中が、全世界武装プロレタリアートの統合を可能としていきつつあるのだ。しかし、かかる客観条件の煮つまりに我々は身をまかせていることは許されない。今こそ、より鋭く、より広い主体的かかわりが問われているのである。この主体的かかわりを、いかなる方向に、いかになしていくかこそ問われている現代革命論なのであり、我々は、帝国主義内部での党による目的意識的な、世界革命戦争の開始としての前段階武装蜂起と、これを媒介とする労働者国家の世界革命根拠地への転換ー世界革命戦争への移行としてその基本軸を形成してきたのである。

我々は、目的意識的に、レーニンの一国的な宣伝の党を超克する。世界的な宣伝と軍事の党建設にのり出しているのであり、この建設過程は、とりもなおさず、我々の主体的状況への切り込みによる政治的変動、すなわち前段階武装蜂起と、それによる世界武装プロレタリアートのヘゲモニー確立の過程としてもあるのである。我々は、この未来における、革命のダイナミックを高揚を、客体条件を歴史的・現実的にとらえる中で確信し、それへ向かってただひたすら主体的にまい進せんとしている。

一切のスターリニスト的客観主義・待期主義は、我々と全く無縁の存在であり、歴史的与件に対し、主体的にどうかかわるべきかを最も鋭くつき迫り、それを現時点にあっては、世界的軍事の党建設ー前段階武装蜂起貫徹としてとらえているのが我々である。

我々は、かかる主体的状況の切り開きの第一歩として、このハイ・ジャックを設定したのであり、これによる、世界党建設の準備の具体化、党の武装の実態化こそが、日本における、そして全世界帝国主義内部における前段階武装蜂起を可能としていくのである。

全世界のプロレタリア人民諸君！日本のプロレタリア人民諸君！

今、この我々のハイ・ジャックをめぐって、現代過渡期世界の奇妙な国際政治が展開されつつある。我々の国際根拠地建設を挫折せしめ、国内の法と秩序をさらに強化やんとする日本政府ブルジョアジーと、北朝鮮の攻撃と、自国内部における階級闘争の結合とを極度に恐れ軍事独裁をしく南朝鮮政府ブルジョアジーとの共謀による全く愚劣な国際的対応がなされつつある。

この事実関係は明確にしておかねばなるまい。日本の、いや全世界のプロレタリア人民に知っておいてほしい問題である。我々が制圧した飛行機が給油の際着陸した福岡において、あからさまに、故意にさされた離陸のひきのばしは、何のためのものだったのか、それはあきらかに、我々をピョンヤンだといつわってソウルにおろすための陰謀を日本政府が韓国政府との取引によって完成させるために必要だったのである。

我々の飛行機が西日本海を北に直進し、朝鮮半島に入ったとき（それは確かに三十八度線を突破していた）我々のピョンヤンの呼び出しに対して、応答した飛行場があった。この飛行場、すなわち「ピョンヤン飛行場」の誘導により、我々は、ピョンヤンならぬソウルにおりたのである。我々内部の機転と周囲の情況に対する不信感が、外からの「ピョンヤンである」「日本帝国主義に反対する皆さんの到着を歓迎します」……という数人の「歓迎者」による言葉にまどわされることなく機内へふみとどまらせたのであるが、それはまさに危機一髪であった。このように、我々は、決してソウルに不時着したのではない。日本政府と南朝鮮政府によって不時着させられたのである。

かかる時点にあって、我々は、我々にとって唯一で、最大の力である乗客の制圧の強化（それは物理的に彼らのこう束を強めたのではないことは当然であるが）と、それを可能とする我々自身の最終局面における機体もろともの自爆の決意の深化とをなしていく以外に方法はなかった。我々の武力が弱く、そして、全員ブルジョア法によって拘束され（全国指名手配であったり保釈中であったりすること）ている中で、にもかかわらず、世界にはばたき、自らの武装を獲得するためには、我々の文字通り決死の覚悟を基礎とした乗客をまき込んでのハイ・ジャック作戦しか残された道はなく、そしてそれの本質が極限的にとわれる段階に入ったのである。

我々は闘った。日本政府の卑劣な南朝鮮政府への責任転嫁と、南朝鮮政府の強硬な政策、そして、この地が、鋭いブルジョア独裁をしく南朝鮮であること。この時点にあって、我々は、なにものにもまさる非妥協性を要請されていた。まさに、乗客を乗せてピョンヤンへ行くのか、それとも自爆かである。この決意、自己の理論を断固として確信し、それに生命を賭けることのできる精神力こそ、この危機にあっての我々の勝利をもたらしたのである。

我々の闘争は、まだ第一歩を踏み出したにすぎない。これから北朝鮮に到着し切れるかいなか、北朝鮮に到着した後、軍事訓練と、キューバ、北ベトナムへのさらなる飛行とが可能となるかいなか、そしてその後は……。全く未知の世界である。しかし、我々は確信している。我々の主体的切り開きのみが局面の展開を可能とし、これが可能となる客観的条件が煮つまっていることを。そして、この情況に対する主体的かかわりを媒介としてのみ真に正しい理論の創出と、新たなる豊かな戦略・戦術の確定が可能となるのであり、又、これによってのみ、新たなる実践を媒介としての現状とは全く異なる組織内容の獲得―人間諸関係の変革も可能となるのである。

革命的マルクス主義の理論を闘うことなくこねくりまわし、社会主義経済の姿を展望し現状を固定化するものはエセ・マル

キストである。全体をふまえて、それへの主体的かかわりを現実の運動の中で確定していくことこそ真のマルキストの姿であり、かかる姿勢からのみ、あふれ出ずる情熱による豊かな、そしてすぐれて創造的な理論が、戦略・戦術が創出されていくのである。

我々は、ブルジョア社会のアカをこそぎ落し、新しい社会的諸関係を創出する世界プロレタリア解放への道、避けることのできないブルジョア独裁権力との熾烈で血みどろの世界的な闘い、ブルジョアジーとプロレタリアートとの生命を賭けた総力戦、すなわち世界革命戦争の時代を今まさに客体的条件の成熟の中で、主体的に切り開らかんとしているのである。

全世界のプロレタリア人民諸君！

日本のプロレタリア人民諸君！

闘おうではないか。今こそ武器を持ち堂々しく立ち上がるときなのだ。武器を使うことに習熟しようとしない階級は、奴隷の階級である。我々がブルジョア独裁の中でかいならされていた時代は終りつつあるのだ。主体的に、主体的に、あくまで主体的に現状にかかわり、困難を克服し、我々の未来を、全世界を自らの手で獲得していこうではないか。

我々の、ハイ・ジャック作戦が、あきらかにブルジョア権力との新たなる攻防局面をつくり出し、階級闘争の質的転換―世界性と革命性の獲得への第一歩となることを確信して、闘争宣言にかえたいと思います。

共産主義者同盟赤軍派の一兵士として南朝鮮ソウルでの機体内部にて

一九七〇年四月三日

最後に、我々の、このハイ・ジャックが、不測の事態で、必要以上に永びいたのに、最終的にねばり勝ちしえたのは、乗客の方々の強い支援と協力があったからである。我々はこのことについて、乗客の方々に深く感謝している。同時に、乗客の家族の方々は、非常に心配されたことと思う。深くおわびする。だが、その意は、唯一、我々の初志（前段階武装蜂起―世界革命戦争）を貫徹することによってのみ表明されることである。

ソウルからの闘争宣言

全世界のプロレタリア人民諸君！
日本のプロレタリア人民諸君！

国家・民族の現実の壁のぶ厚さと、その重圧をひしひしと感ずる機内にあって、我々のこの闘争、文字通り我々の、そして階級闘争総体の飛躍をかけたこの闘争に関する若干の闘争宣言を記しておきたいと思います。ブルジョアジーによるワイ少なデマゴギーが乱れとぶ中でこの闘争宣言は重要だと思います。

三月三十一日午前七時一〇分羽田発福岡着の日航機において我々赤軍派同志九名が遂行したいわゆるハイ・ジャックは南朝鮮ソウルへの不時着（一般にはそう報道されているに相違ない）によって予期以上の国際政治を引き出している。緊迫し、混迷した国際政治への我々の主体的切り込みは、局面の流動化を引き出さずにはおかないのである。

現代帝国主義国家内部での労働運動の全くの経済主義、排外主義への転落、帝国主義労働運動への変質と、労働者国家におけるスターリニスト官僚の堕落、日和見主義・一国主義の論理化、かかる中で表面的には運動は停滞しつつも、その増大する内部矛盾が大きな流動の可能性を生み出していっている。そうであるが故に、武装の問題を党が目的意識的に追求し、それを全世界的に統合することが最も鋭く問われている段階こそ、現在であり、上記の客体的与件に我々が主体的に攻撃的に切り込む以外にない攻撃型階級闘争の時代こそ現在なのである。

そして、この階級闘争の質は、世界的階級闘争史の最終的段階が現在窮極的に者つまりつつあるのであり、その中における、労働者国家内部の動揺・分解と現代帝国主義における帝国主義の法則（過剰生産・市場分割戦・帝国主義間戦争）の不貫徹とそこから生じる内部矛盾の増大、後進国への矛盾の集中が、全世界武装プロレタリアートの統合を可能としていきつつあるのだ。しかし、かかる客観条件の煮つまりに我々は身をまかせていることは許されない。今こそ、より鋭く、より広い主体的かかわりが問われているのである。この主体的かかわりを、いかなる方向に、いかにたしていくかこそ問われている現代革命論なのであり、我々は、帝国主義内部での党による目的意識的な、世界革命戦争の開始としての前段階武装蜂起と、これを媒介とする労働者国家の世界革命根拠地への転換ー世界革命戦争への移行としてその基本軸を形成してきたのである。

我々は、目的意識的に、レーニンの一国的な宣伝の党を超克する。世界的な宣伝と軍事の党建設にのり出しているのであり、この建設過程は、とりもなおさず、我々の主体的状況への切り込みによる政治的変動、すなわち前段階武装蜂起と、それによる世界武装プロレタリアートのヘゲモニー確立の過程としてもあるのである。我々は、この未来における、革命のダイナミックを高揚を、客体条件を歴史的・現実的にとらえる中で確信し、それへ向かってただひたすら主体的にまい進せんとしている。

一切のスターリニスト的客観主義・待期主義は、我々と全く無縁の存在であり、歴史的与件に対し、主体的にどうかかわるべきかを最も鋭くつき迫り、それを現時点にあっては、世界的軍事の党建設ー前段階武装蜂起貫徹としてとらえているのが我々である。

我々は、かかる主体的状況の切り開きの第一歩として、このハイ・ジャックを設定したのであり、これによる、世界党建設の準備の具体化、党の武装の実態化こそが、日本における、そして全世界帝国主義内部における前段階武装蜂起を可能としていくのである。

全世界のプロレタリア人民諸君！日本のプロレタリア人民諸君！

共産主義者同盟赤軍派
日本委員会宣伝局発行
赤　軍　特別号
発行　1970年6月10日
価格　200円
連絡先　(813)1864